

「神がいる世界」を見る目」

(ヨハネによる福音書 3:1-17)

今日の福音に登場するニコデモはとても優秀で、皆から尊敬される律法の教師でした。この人が行けないなら、誰が天国に行けるのだろうか。そういう人でした。しかし、彼は不安でした。自分は本当に神に認められるだろうか、天国に行けるだろうか。その不安に誘われ、ある夜、彼は主イエスのもとを訪れます。夜に訪れたのは、他人の目を気にしたからでしょうか。高名なラビである自分が、イエスのもとを訪れたことがバレることを恐れたのかもしれませんが。それでも主イエスのもとを訪れるほど、彼は真理を求めていたのです。たしかに、主イエスを通してこそ、天の国の真実が明らかにされます。しかし、彼は主イエスが言っていることがわかりませんでした。

どんなに知識があっても、尊敬されていても、主イエスが言われるとおりの「新たに生まれ」なければ、主イエスによって示される真理はわからないのです。同じ世界の同じ出来事を見ても、肉の世界に留まっている目で見ると、霊による目で見るとでは世界が異なって見えます。人の目を気にして夜に訪れたニコデモは、まだ肉に留まっていたのです。

霊による目とは、「神がいる世界」を見る目です。霊の目は、修行を積むことや善行を重ねることでは得られるものではありません。水と聖霊によって洗礼を受け、神の子どもとしての新たな命をいただき、神とともにあるその命を生きるなかでこそ、「神がいる世界」への目は開かれるのです。たしかにこの世界に神がおられること、神の霊がこの世界に吹いていることを信じ、感じて生きること。それによってこそ、霊の目は開かれ、主イエスが語ることの真実が分かります。そして、霊の目によってこそ、わたしたちは今でも、この世の出来事を通して、神を知り、天の国の真実を知ることができるのです。

ニコデモはわたしたちの姿を代表しているように感じられます。わたしたちが主イエスをまことに知ること、知識が、他者からの目が、この世の名誉が邪魔するのであれば、それらは何の価値もありません。今もここに吹いている霊の語りかけに耳を澄まし、神がいる世界への目が開かれますように。その目が開かれるなら、「神はご自分の独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」という神の愛が、「わたし」に注がれていることをわたしたちは知るので。